

[dō:k]

DONC どんく

発行

三重日仏協会

SOCIÉTÉ FRANCO-JAPONAISE DE MIE

事務局 津市東丸之内21-4 オーデンビル

3F / Siege : Oden Building 21-4

Higashi Marunouchi Tsu JAPON

N° 31 janvier 1995 SOCIÉTÉ FRANCO-JAPONAISE DE MIE

〈ルウ・クラボ〉の公演 三重県民を魅了 三重県 日仏交流の歴史に一ページを画す

三重日仏協会が初めての本格的な国際交流事業として取り組んだ、フランス南西部の民族舞踊団〈ルウ・クラボ・ドゥ・セミセンス〉の招請については、会員各位はもとより「まつり博」協会をはじめ各方面の大きな協力を得て無事成功裡に終えることができました。

クロード・スアルズ団長以下一行25人は10月23日に来日、あわただしく京都・奈良の観光を楽しんだあと7日間三重県に滞在し、伊勢市の「まつり博」会場をはじめ桑名、阿児、津の各地でダイナミックでかつ可愛い演技を披露して絶賛を博したほか、ホームステイや交歓パーティーなど市民レベルの日仏交流を深め、31日全員元気で帰国して行きました。この間、同舞踊団の訪日



【写真】 10/29 津市・プラザ洞津で開かれた三重日仏協会主催による歓迎レセプション。

左端はあいさつをする武村会長

をコーディネートした ASIA (アルカシオン湾国際文化協会) の山口千佳・モンドゥアン夫人が通訳を兼ねて同伴したほか、三重日仏協会から喜田紘美、菅谷光美の両夫人が終始一行に付添い、財政を含むすべてのマネージを引き受けていただきました。

《Lous Crabots de Semisens》

随 行 記

喜田紘美・菅谷光美

《セミセンスの小さな山羊たち》が故郷に帰ってやがて一カ月になる。関西空港で別れるとき、一列に並んで順番に頬にキスをしてくれた、彼らの頬の柔らかな暖かさを今も時々思い出す。私たちにとってあの九日間は、日本にいながら海外旅行以上に非日本的な旅であった。緑豊かな山々や青い海、静かな町並み、バスの窓に広がる日本の風景はいつも以上に美しく思えた。秋にしては暑かったが天候にも恵まれ、事故もなく無事に旅を終えることができ本当に良かった



メンバーといっしょに、
喜田さん(左)と菅谷さん

と思っている。六月からの準備、そして慣れない旅行業と大変ではあったが、フランスの素朴でサンパな若者たちに逢うことができ楽しかった。

〈食べ物〉

最初の計画では一泊目は大阪で洋食、二泊目が京都の和食の予定であった。しかし大韓航空のフライトキャンセルに会い一日到着が遅れたため、一泊目が京都になり最初の夜から和食が並んだ。様々な器やお箸の珍しさに大喜びしたものの、結局食べられるものは殆どなく、以後重箱風の塗の器を見ると怯えた表情をみせる。かといって洋食を好むわけでもなく、ステーキの時だけ笑顔になる。やはり肉食が一番らしい。「フランス人にしては珍しくグルモンじゃないわね」とは通訳さんの弁。

〈バスの中〉

バスの中は予想に反してとても静か。テープ持参で好みの音楽を聞きながら、カードをしたりして過ごす。時々通路に一列に並んで「疲れをとるダンス」を踊る。運転手さんの許可を得て、私達も一緒に踊った。伊勢や津のパーティーで皆で踊ったあの踊りである。

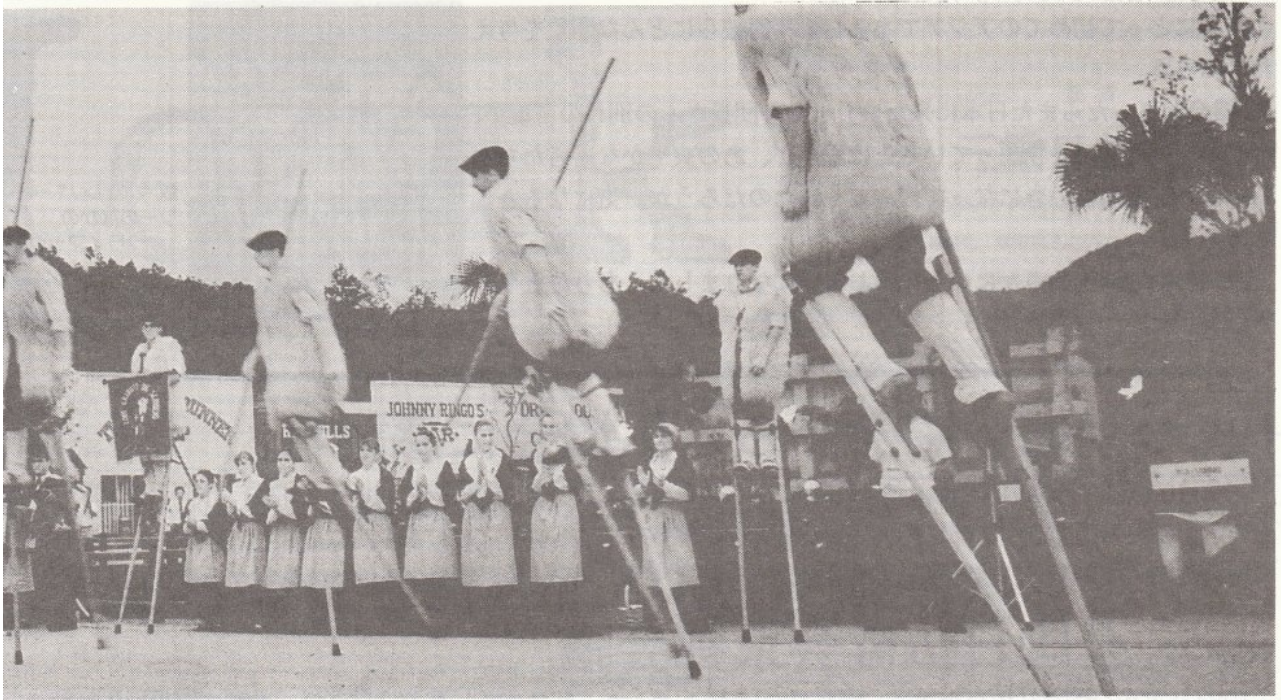
いつもビデオを構えている音楽家、美しくもなんともない道路にばかりカメラを向ける。何故かと思えば、きれいに磨かれた新車ばかり走っているのが不思議だと言う。

〈便り〉

旅行中買いに走った切手は約四百枚。投函依頼の絵葉書が毎日束になって私達の手元に届く。彼らがゆく先々で買った美しい日本の風景と日本についての感想が、約四百枚フランスに飛んだ。同じ舞踊団で今回来日できなかった全ての団員に、便りを出すことにしていると団長さんが言った。



生まれて初めての日本食(京都の宿舎で)



ダイナミックな木の足の踊り (まつり博で)

〈笑顔〉

踊っている時の楽しそうな笑顔が可愛かった。本当は皆疲れていて笑顔どころではなかったのだ。でも踊る時にはきれいな笑顔を見せる。彼らのプロ意識を見る思いがした。

〈気は優しくて力持ち〉

男性の激しいダンスは体力的に二十五歳が限界だという。阿児町公演の時、花束贈呈をした子供を高い木の脚の上から軽々と抱き上げ、会場を回ったのも驚いたが、まつり博会場で三十本近い缶ジュースが入った箱を一人で抱え、風のごとく走り去った時も驚いた。

鍛えられた強い体と優しさを合わせもつ、働き者で気分のいい若者たちだった。



書道に挑戦。全員自「作品」をおみやげに帰国した (鈴鹿・明峰堂で)

〈ホテル〉

伊勢のホテルはシングルだった。一泊目、朝の三時頃までバタンバタンと訪問ごっこ。たまりかねて団長さんをお願いしたら、二泊目はシーン。翌朝のチェックアウトで別チャンネルのテレビ料金を請求される。一人目は頬を染めて素直に払う。そのあと数人、間違えて押しただけだと言い張り払わず。顔ぶれは、裏番組を見ても不思議でない人ばかり。昨夜静かだったのはテレビのせいかもしれないことになった。

〈ホームステイ〉

二人ずつペアで泊まれると思いついていたらしい。特に最初の伊勢では、予定していたお土産も足りない、一人では不安と、みな青くなった。翌朝ほんとに皆に会えるのか心配だったという。名前を入れ替え仲よし同志で泊まったチャッカリ組もいたようだ。



可愛い少女たちの民族舞踊 (まつり博で)

彼らにとって初めてのアジアである日本は、彼らにどんな印象を与えたのだろうか。

「機会があったらまた日本にきたい」という団長さんの別れの言葉が、今回の事業の成功を物語っているとは思いますが、あの爽やかな若者たちも日本いえ三重県びいきになって帰ってくれたのだろうか。気になるところである。

県内各地で沢山の方々からいろいろお世話になりました。ありがとうございました。



数々のレパートリーの中のクライマックス

(桑名・ドミニク・ドーセの店前で)

「まつり博」協会から日仏協会に感謝状

三重日仏協会は今回の「まつり博」に際して、〈ルウ・クラボ〉の招請事業や、10月17日の「ドミニク・ドーセの店」の協力による〈フランス・パンのおいしい食べ方〉イベントなどで積極的に参加しました。これに対して博覧会終了後の11月28日、まつり博協会から会長・田川亮三三重県知事の名前で感謝状が伝達されました。

10/22 全国日仏協会京都会議

1994年度の全国日仏協会会議は、建都1200年を記念して『時代祭り』の10月22日、京都の関西日仏学館で開催され、三重日仏協会からも、〈LOUS CRABOT〉の受け入れで多忙な時期でしたが代表一人が参加しました。

会議では「京都とフランス」一過去・現在・未来と題してパネルディスカッションがおこなわれ、京都大学名誉教授・河野健二氏をコーディネイターに、同・大橋保夫氏、前日仏学館館長で立命館大学教授・ミシェル・ワッセルマン氏、染色作家・森口邦彦氏、裏千家家元夫人・千登三子氏が広い視野から国際交流の基本点や今後の日仏関係などについて発言、そのあと全国の日仏協会代表の交流が続きました。

席上、あいさつに立ったジャン＝ベルナル・ウーヴリュエ駐日フランス大使は「全国の日仏協会のさまざまな活動に敬意を表したい。いまミッテラン大統領を中心に、1996年にフランスを日本に紹介するための多彩なprojetsが計画されている。その節にはよろしく」と述べました。また(財)日仏会館の白井副理事長は「日仏会館70周年を記念して現在東京・恵比寿に建築中の新会館が来年竣工する。次の全国会議は是非そこでやってほしい」とあいさつしました。

フランスの新聞

—「レキップ」がトップ—

今年の3月から6月にかけてフランス全国で実施された大規模な調査によると、毎日すくなくとも1紙の全国紙を読む人は915万人だという。そのうち221万人がスポーツ専門の「レキップ」を、そして219万7,000人が「ル・モンド」を読んでいる。この2紙のほかにも、「ル・フィガロ」(174万8,000)、「ル・パリジャン」(173万5,000)、「フランス・ソワール」(101万8,000)の3紙が100万以上の読者を獲得している。新聞の購読にさく時間は1日平均38分となっている。なお、日刊紙の読者の58%は、全国紙のほかに地方紙も読んでいる。日刊紙の読者の57%は男性で、40%は30歳以下である。さらに、全国紙に限ってみると、読者の4人に1人は15歳から24歳という若い年齢層に属している。しかもこの年齢層では、購読する新聞の種類が全国平均とは大きく異なっており、たとえば25歳以下をとると、「アンフォ・マタン」の読者が全体の28.3%で第1位、それに続くのが26.5%を得た「レキップ」である。「ル・モンド」は23.9%、「リベラシオン」は19.4%となっている。逆に読者が高齢者に偏っているのがカトリック系の「ラ・クロワ」(全読者の46.7%が60歳以上)で、「ル・フィガロ」も38.6%が60歳を越えている。これら2紙はまた、女性読者が多いことも特徴となっており、「ラ・クロワ」の場合は全体の57%が、そして、「ル・フィガロ」については48.8%が女性である。

(フランス大使館発行「フランス便り」12月号より)